

青春ブタ野郎はお人好
し友人Bの夢を見ない

ゆずれもん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし咲太に国見以外の男友達がいたら。

変わることもあるし変わらないこともあるだろう。

そんな日常の非日常を描いた物語です。

主人公の名前は横川 翔（よこかわ かける）

咲太達と同級生。咲太達とは高1で知り合う。

作者はアニメしか見てないので、原作未読、映画未視聴です。

にわかでごめんなさい。

ヒロインは古賀朋絵か豊浜のどかにしよかなあ、と考えています。

目次

バニーガール先輩①

—
1

バニーガール先輩①

「なあ、お前らはバニーガールは好きか？」

朝の通学電車で揺られながら、

突然咲太が俺と佑真に聞いてきた。

「はあ？」

俺が訝しげに咲太を見ると、

今度は佑真が

「それでもない」

と即答した。

さく「なら、大好きか？」

ゆう「ああ！大好きだ！」

「お前らはなにを言ってるんだ、」

さく「横川は好きじゃないのか？」

「そりゃあ好きに決まってるだろ」

さく「だよなあ」

バカな話をしてる自覚はあるけど、この時間が楽で好きなのは事実だ。

これで話は終わりかと思ったら咲太は続けて、

さく「例えば、図書館で魅力的なバニーガールにあつたらどうする？」

ゆう「二度見するな」

さく「だよな」

「それからガン見だな」

さく「だよな！」

こいつは一体なにが言いたいんだか…

ちよつと疑問に思いつつも電車を降りる頃には別のことを考えていた。

大勢の生徒が学校に向かって歩いている。

人混み中にはうちの学校の有名人である桜島先輩も俺たちの前方を歩いていた。

それを見つけると、咲太はまた話しかけてきた。

さく「なあ、桜島先輩のこと見えてるよな？」

ゆう「そりやバツチリと。」

さく「あの人、どーゆー人なんだろう」

「そりやうちの学校一の有名人じゃん？」

さく「まあそうだよな。」

ゆう「活動休止中とはいえ芸能人じゃん？」

さく「ああ、うちの学校にいと知った時は流石に驚いた」

ゆう「咲太が牧之原翔子以外の女子に興味を持つのは喜ばしいことなんだが、流石に

あの人は無理だろう」

「いいじゃねえか、夢を見たいお年頃なんだよ咲太くんは。」

さく「うるさいな横川。」

僕は告白するとも好きになったとも言つてないぞ」

ゆう「じゃあなんだ？」

さく「いや、学校じゃ誰かと一緒にいるの見ないよなって思つて。」

いつも1人つつーかさ」

すると、佑真の彼女である上里が

「佑真、おはよう」

と言つて佑真を連れてつた。

佑真はじゃあな、と言つて離れていった。

上里は今日も咲太を睨んでる。

「さすが病院送りくんは友達達の彼女にもモテモテだな」

さく「勘弁してくれ、」

今日の咲太は少し変だったけど、あいつはいつも変だから気にしないことにした。

教室に入ればまたいつもの日常が始まる。

く次の日の朝く

電車を降りて歩いて歩いているとまた前方に桜島先輩がいた。

俺は昨日の会話を思い出すと、

今日は佑真が話し始めた。

ゆう「部活の先輩に聞いたんだけど、桜島先輩、1年の最初の頃は全然学校に来てなかったらしい」

さく「なんで？」

佑真は桜島先輩が1年夏から登校し始めることになった経緯を俺たちに教えてくれた。

さく「それはしんどいな」

「二度でできたグループってのは途中から入れるもんでもないし、ましてや桜島先輩は有名人大もんな」

ゆう「だろ？」

今日も桜島先輩は1人で歩いている。

く放課後く

佑真は部活があつたが、俺と咲太はなにもなかつたので2人で帰ることにした。帰路の途中、俺は咲太に問いかけた。

「最近桜島先輩にご執心のようだけど、一目惚れでもしたのか？」

さく「違うよ。ちよつと衝撃的すぎる事件があつただけだ」

「へえ。それは是非教えてくれよ。」

さく「一応本人からは口止めされてるんだけど、

まあ横川は口堅いし、こんな出来事一人で背負えないから教えるか」

「さすが愛すべきクズ野郎だな」

さく「お前が聞いたんだろ」

咲太は休日にあつた、バニーガール先輩の出来事を教えてくれた。

「そりやなかなか刺激的な日だったな」

さく「だろ？」

そんなこんなで駅のホームまで来ると、そこには噂のタネの桜島先輩がいた。

すると、近くにいる他校の男子生徒と見受けられる男が桜島先輩の写真を撮ろうとしていた。

さく「常識の無い学生もいるもんだな」

「これだから最近の若者は。。。」

さく「俺たちも十分その一員なんだけどな」

そんなバカなことを言いながら、

写真を撮ろうとする男と桜島先輩の間に立ち塞がった。

男は「なんだよ!!?」

とチンピラのように威嚇するが、

俺と咲太がちらつと通報を匂わせるとすぐ去っていった。

(これだから最近の若者は…)

ことなきを得て、電車を待ったために桜島先輩の横に立つ俺と咲太。

すると桜島先輩はつけていたイヤホンを外し、

こちらを向いて

「ありがとう」

と言ってきた。

俺と咲太は思わず顔を見合わせる。

すると桜島先輩は

「余計な事しないでって怒られると思った?」

と言ってくるので俺と咲太は声を合わせて

「はっ」

と返事してしまった。

桜島先輩は

「それは思うだけで我慢してる」

と俺たちに事実を述べる。

さく「だったらそれも言わないで欲しかった」

「ははっ、確かに」

的確な咲太のツツコミに思わず笑ってしまう。

「あーゆーのは慣れてるから。」

桜島先輩は淡々と言う

その言葉に咲太は少し怒ったかのように

「そーゆーのは慣れてもなにかがすり減るものでしょ」

と言った。

桜島先輩は少し嬉しそうに

「すり減る、、、確かにね、、」

と言った。

「ほんと咲太は稀に良いこと言うね」

さく「稀にとは心外だなあ。僕はいつも良いことしか言わないだろう」
軽口を叩いていると桜島先輩の電話が鳴る。

桜島先輩は画面を見ると、電話に出ることなくカバンにしまった。

「電話でなくて良いんですか？」

と聞くと

「電車きたし。それにあの人の要件はわかってる。」

と言つてさつさと電車に乗ってしまったので、

俺達も後を追つて電車に乗り、隣に座った。

ちなみに桜島先輩の隣に座つたのは咲太だけで、俺は咲太の隣だ。

咲太は桜島先輩と面識があるが、名前も知られてない有名人の先輩の隣を陣取るほど俺の肝は座つてない。

電車が動き始めると、咲太は桜島先輩に話しかけた。

「昨日のことなんですけど、」

すると桜島先輩は

「忘れなさいと言つたでしょ」

というと、チラッと俺の方を見た。

「ちなみに俺もそのことはこいつから聞いたんで気にしなくて良いですよ」と伝えると、

咲太を睨む桜島先輩。

咲太は気にせず話を進めた。

さく「あのバニー姿はエロすぎて忘れることは無理でした。」

桜島先輩は焦ったように声を上げて

「ちよつと！私を想像して変なことしないでしようね!？」

というので周りにいた人が一斉にこちらを向く。

(何この先輩可愛すぎないか)

桜島先輩は我に帰ると

「別に年下の男の子にエッチな想像されるくらい私は平気だけどね。」

といった。

可愛かった。

まい「ねえ、梓川くん」

さく「名前、覚えててくれたんですね」

まい 「君の噂見たわよ。暴力事件を起こして同級生3人を病院送りにしたとか」

さく 「興味を持ってもらえて光栄です」

まい 「すごいわよね、こんな一個人の情報まで堂々と晒されるんだから。」

さく 「ここまで書かれてるとは知りませんでした」

まい 「自分で調べたりはしないんだ」

さく 「スマホを持っていないので」

まい 「ほんとに？」

さく 「前は使っていたんですけどむしゃくしゃして海に投げ捨てました。」

まい 「ゴミはゴミ箱に捨てなさい。」

君、友達いないでしょ」

さく 「友達なら3人もいます」

まい 「3人は”も”かしら」

さく 「友達なんて3人もいれば十分だと僕は思いますけどね。そいつらと一生友達すれば良いんだし」

「ちなみにその3人の中に俺は入っているのか？」

さく 「当たり前だ。お前には一生友達してもらおうつもりだ」

「そりゃどーも」

まい「君がその少ない友達の一人ってわけね」

「横川 翔です。横の川に飛翔するで横川翔。よろしく願います、芸能人の桜島先輩」

まい「よろしくね、横川くん。」

さく「で、先輩はどう思ったんですか？病院送り事件の噂のこと」

まい「少し考えればわかるでしょ。」

そんな大事件起こした人間が平気な顔して高校に通えるわけがない。」

さく「そのセリフ、クラスの連中に聞かせてやりたいなあ」

まい「違うなら違うって自分で言いなさい」

さく「噂って空気みたいなものじゃないですか。」

最近じゃ読まなきやいけないものになってる空気。

読めないだけでダメなやつ扱いされる空気。

あれってその空気を作ってる本人達に当事者意識なんてないから、空気と戦うなんて馬鹿馬鹿しいですって。」

まい「だから誤解はそのままにして、戦う前から諦めるんだ」

そう言うのと桜島先輩は悲しげな表情をした。

それがどんな気持ちなのか、女優としての作られた顔なのか俺にはさっぱりわからな

い。

そんな表情の桜島先輩を見て、咲太は尋ねた。

「次は先輩が話してくれる番です」